

ヴェーダ語 *vidh-*, 古アヴェスタ語 *vid-* 「敬意を表する, 捧げる」をめぐる問題

On Vedic *vidh-*, Old Avestan *vid-* 'honor, offer'

アダム・キャット

Adam CATT

Abstract Ever since the influential proposals of Thieme (1949) and Hoffmann (1969), the root *vidh-* is commonly thought to have arisen by incorporation of the preverb *vi* with the root *dhā-*. *vi-dhā-* means 'distribute, allocate', and the root *vidh-* is usually assigned a similar semantic value in more recent dictionaries and translations. Based on a careful analysis of the syntax and semantics of Vedic *vidh-* and its Old Avestan counterpart *vid-*, I argue that the root concerned existed already in Proto-Indo-Iranian as a root unrelated to *vi-dhā-*. This root appears in sacrificial contexts, and its meaning is essentially 'honor, offer', as recognized by older dictionaries. An important result of this study is the finding that the commonly supposed construction for *vidh-* in which the recipient is placed in the accusative does not appear in the R̥gveda. This discovery allows us to clarify some commonly mistranslated passages and misunderstood constructions. A detailed appendix of construction types for *vidh-* in the R̥gveda and Atharvaveda has been included.

Keywords Vedic (ヴェーダ語), Avestan (アヴェスタ語), Indo-Iranian (インド・イラン語), R̥gveda (リグ・ヴェーダ), sacrificial verbs (祭式動詞)

は じ め に

ヴェーダ語の語根 *vidh-*は、20世紀前半までの先行研究において「(神に) 仕える, 敬意を表する, (供物を) 捧げる」という意味を有すると考えられた [Petersburger Wörterbuch, Grassmann 1872]。このような *vidh-*の解釈に初めて異論を唱えたのが Paul Thieme である。Thieme [1949: 36-37] は、次の (1), (2) の例を挙げて *vidh-*は「分配する」¹⁾を表しているとした。

1) Thieme [loc. cit.]: 'jmdm. durch etwas etwas zuteilen'. (1) でも見られるように、ほとんどの場合には *vidh-*「zuteilen 分配する」の受益者「jemandem」が「神」で、そして分配する対象の「etwas」および手段・道具の「durch etwas」が何らかの「供物」を表す。

(1) RV 8.23.21ab (Uṣṇih)

yó asmai havyádātibhir
 who-NOM 3SG-DAT gifts.of.oblations-INS
 āhutim mārto vidhat
 oblation-ACC mortal-NOM allot-AOR.IND.3SG

「供物から成る贈り物を以て, 彼 (火神 Agni) に供物を分配した人間は……」²⁾

(2) RV 8.96.8d (Triṣṭubh)

śúṣman ta enā haviṣā vidhema
 vehemence-ACC 2SG-DAT this-INS oblation-INS allot-AOR.OPT.1PL

「この供物を以て, われら願わくは, 汝 (Indra) に荒々しさを分配せんことを」³⁾

(1), (2) では, 定動詞 ávidhat, vidhema は, 主格に置かれる動作主⁴⁾ (通常は人間), 対格に置かれる対象 (供物), 与格に置かれる受益者 (神), そして具格に置かれる手段・道具・付随物 (供物) という4つの名詞句を伴っている。これを表1のように例示することができる。

表1 vidh- が伴う名詞句

意味役割	格	指す対象
動作主	主格	人間
対象	対格	供物
受益者	与格	神
手段・道具・付随物	具格	供物

vidh- が「分配する」を表しているとするこの Thieme の考え方は, 彼の vidh- に関する語源説に基づいている。Thieme によると, 語根と考えられてきた vidh- は本来, preverb vi および語根 dhā-, すなわち vi-dhā- 「分配する, 配列するなど」にさかのぼるものである。また (1), (2) で見た, 供物「を」神「に」という名詞句が現れる事実は, vidh- を「分配する」と解釈する説の正しさを裏付けていると Thieme は考えた。Thieme の説は後に Hoffmann [1969] に詳しく論じられ, 現在広く支持されている [EWAia: s. v., Lubotsky 1994, Jamison 1999, García-Ramón 2004, Witzel & Gotō 2007, Jamison & Brereton 2014 など]。

しかし, この広く受け入れられている vidh- の説には問題がある。preverb vi が語根 dhā- の一部になって新しい語根 vidh- ができたというのが Thieme 説の大前提であるが, preverb が動詞語根の一部になる例はヴェーダ語に他に存在しない。また, vidh- を vi-dhā- から導く場合, この2つの語根に意味が共通すると予測されるが, vidh- は人間が

2) Thieme [loc. cit.]: 'der Sterbliche, der ihm durch Gaben von Opferspeisen den Zuguß zuteilte [...]'. Geldner [RV 訳]: 'Der Sterbliche, der ihm die Opferung durch die Opferanteile recht gemacht hat, ...'. 参考のため, 以下の RV からの例には Geldner の訳を脚注に記載することにする。

3) Thieme [loc. cit.]: 'wir wollen dir durch diesen Opferguß Ungestüm zuteilen (schaffen)'. Geldner [RV 訳]: 'wir wollen deinem Mut mit diesem Opfer huldigen'.

4) 動作主は, (2) のように文脈から分かる場合, 名詞句で表さなくてもよい。

動作主で神が受益者であるのに対して *vi-dhā-* は神が動作主で人間が受益者である [Bodewitz 2008: 81]。つまり動作主と受益者の観点から *vidh-* と *vi-dhā-* は相補的な分布を成していると言える。

さらに、*vidh-* が *vi-dhā-* と語源的につながっている説の裏付けの1つが、*vidh-* が「分配する」という意味にふさわしい名詞句（与格の受益者+対格の供物）を伴っていることである⁵⁾。しかし、大半の場合、*vidh-* は対格の名詞句を伴わない。また、ヴェーダ語の語根 *vidh-* に対応する古アヴェスタ語の語根 *vid-* は対格の名詞句を伴っていない。*īd-*, *dās-*, *saparya-* などの「祭式動詞」が取る構文を *vidh-* の構文と比較することによって、今までに理解されなかった重要な違いが見えてくる。*īd-*, *dās-*, *saparya-* の場合、受益者は与格または対格で現れるのに対して、*vidh-* の例では、受益者は原則として対格で現れない。*vidh-* の場合、「与格の受益者+具格の供物」が最も頻繁に現れる構文であり、「与格の受益者+対格の供物」はこの構文のヴァリエントに過ぎないと考えられる。従って、「分配する」という解釈の正当性を *vidh-* の「与格の受益者+対格の供物」構文で裏付けようとする Thieme の説には根本的な問題がある。

本稿では、ヴェーダ語 *vidh-*、古アヴェスタ語 *vid-* をめぐる問題を詳しく考察し、*vidh-*、*vid-* は *vi-dhā-* と無関係で、インド・イラン祖語ですでに存在していた独立した語根 **(H)uidh-* にさかのぼると主張する。

I *vidh-*の形式

vidh- は thematic アオリスト語幹 *vidh-a-* を形成する⁶⁾。RV における形式および在証数は以下の通りである⁷⁾。

(3) *vidh-*の RV における形式および在証数

直説法: *avidhat* [3sg. act.] (10x)

指令法: *vidhat* [3sg. act.] (1x), *vidhán* [3pl. act.] (1x), *vidhanta* [3pl. mid.] (1x)

接続法: *vidhāti* [3sg. act.] (1x)

希求法: *vidhéma* [1pl. act.] (21x), *vidhemahi* [1pl. mid.] (1x)

5) Hoffmann [1969: 1]: “In der Tat sprechen die Fällen, in denen *vidh* mit Akkusativ konstruiert wird, für Thiemes Bedeutungsansatz”.

6) Dhātupāṭha (6.36) や Whitney [1885: 160], Macdonell [1910: 329–330], Grassmann [1872: 1280] では、*vidh-* は 6 類 (*tudāti* type) の現在語幹を形成すると考えられていた [Hoffmann 1969]。しかし、*vidh-* が語根 *dās-* の現在語幹および完了語幹と補充関係にある点と [García-Ramón 2004], *vidh-* の直説法が RV (例えば 6.54.4) において過去・直前過去を表しているという点から *vidh-* は 6 類現在ではなく thematic アオリストを形成すると考えるべきである。

7) 慣習に従い、使用例の中にアクセントのある形式がある場合、それを代表例として挙げている。例えば、アクセントのある *vidhéma* は 2 回のみ在証されており、残りの 19 回は無アクセントの *vidhema* であるが、*vidhéma* を代表例として挙げている。

分詞（専ら名詞として語彙化されている）: vidhánt- (30x)

vidhéma は主節にのみ現れ、重音節を前に置くことによって trochaic cadence が作られることから、大半の場合 vidhéma は Triṣṭubh の行末に置かれる。直説法の ávidhat は全て従属節に現れ、通常は行末に置かれる。指令法の vidhanta および希求法の vidhemahi を除いて vidh- の用例は全て能動態で現れる。以下に中・受動態の vidhanta (4) および vidhemahi (5) が使われている箇所を挙げる。

(4) RV 3.3.1ab (Jagatī)

vaiśvānarāya prthupājase vípo
 Vaiśvānara-DAT of.broad.visage-DAT ecstasies-ACC
rātnā vidhanta dharūṇeṣu gātave
 treasures-ACC offer-AOR.INJ.3PL foundations-LOC go-INF

「広き胸郭をもつ (Agni) Vaiśvānara のため、人々は靈感の言葉を宝玉 (真珠) として奉呈す、〔天則の〕根底に達せんがために」⁸⁾

(5) RV 8.19.16cd (Satobr̥hatī)

vayāṃ tát te śávasā gātvittamā
 1PL-NOM that-ACC 2SG-DAT/GEN might-INS best.pathfinders-NOM
índratvotā vidhemahi
 helped.by.you.Indra-NOM offer-AOR.OPT.1PL

「それ (火神 Agni の輝き) を〔この讃歌として〕, Indra よ、汝の支援をも授かるわれら願わくは、汝に捧げんことを、〔汝の〕力によって最もよく道を発見できる者として」⁹⁾

(4) では、vidhanta は中・受動態として機能しておらず、能動態と同じ意味を表していると Hoffmann [1969: 5] は考えた。3人称語尾で特徴的な -t- を保持するため、また韻律の都合に合わせるために 3pl. act. の語尾 -an の代わりに 3pl. mid. の -anta を導入する現象は RV に所々見られる [Jamison 1979]。Jamison が指摘しているように、vidhanta と類似した意味をもつ mahayanta が同じ讃歌 (3.3.3b) に現れ、また -anta で置き換えられている形式が近くの讃歌 3.2, 3.4, 3.6, 3.9 にも見られる。これらの点から中・受動態の vidhanta は、mahayanta との類推あるいは韻律によるものと思われる。

上記の (5) の vidhemahi について、Hoffmann [1969: 6] は中・受動態が機能している

8) 和訳は辻 [1970: 96] による。Geldner [RV 訳]: 'Dem Vaiśvānara von breiter Gestalt weihen sie die Redeperlen, um auf sicherem Grunde zu wandeln, ...'. Hoffmann [1969: 5]: 'dem Vaiśvānara mit der breiten Glanzfläche teilen sie ihre Begeisterungen als Gaben zu, um auf festem Untergrund zu gehen'.

9) Geldner [RV 訳]: '(Deinen Glanz), in dem Varuṇa, Mitra, Aryaman, in dem die Nāsatyas, Bhaga erscheinen, diesen wollen wir verehren, die wir durch deine Macht die besten Pfadfinder (als Dichter) sind, von dir, Indra, unterstützt'. 後で論じるように、vidh- の受益者は対格で現れないので、ここの Geldner の訳 (diesen ... verehren) は不正確だと思われる。

と主張して、「これ（輝き）を我らが十分に授かるように」¹⁰⁾と訳している。8.19.16c の tát は Agni の「輝き」(dyumná-) を指し、また 8.19.15a で「Agni よ、その輝きを〔我らに〕持ってこい」(tád agne dyumnám ā bhara) という文がある。vidhemahi が単に「分配する」を意味するならば、Agni から一旦授かった輝きを再び Agni に分配するという考えられにくい状況になるために、Hoffmann は上のように解釈している。

上の (3) から分かるように、語根 vidh- が定動詞として最もよく現れる形式は 1 人称複数の希求法 vidhēma である。Delbrück [1888: 305, 330] によると、1 人称の希求法は話者の願望を表し、その願望の達成が話者の能力の範囲内がないときに使うものである。vidh- が単に「分配する」を意味するなら、その行為の達成は話者の能力の範囲内にあるので、希求法を使わないはずであるために、従って vidh- は「分配する」ではなくて「(神が) 満足するまで分配する」を意味すると Hoffmann [1969: 3] は考えた。Hoffmann の見方では、能動態の場合には vidh- は「(神が) 満足するまで分配する (zu seiner Zufriedenheit zuteilen)」を意味し、中・受動態の場合には「十分に受ける、満足するまで授かる (sich zur Zufriedenheit zuteilen, genug bekommen)」を意味している。

しかし、Hoffmann の見方には問題がある。idh- 「焚く」、dās- 「奉仕する」、vad- 「話す」、vidh- 「敬意を表する」などの「祭式動詞」は通常、1 人称の希求法でよく使われる [Macdonell 1916: 352]。これらの動詞の 1 人称希求法は、行為の実現が話者の能力の範囲内にあることを表しているのではなくて、祭式に特有の言葉使いを反映している可能性がある [Bodewitz 2008: 88]¹¹⁾。また、vidhemahi が中・受動態として機能しているなら、vidhanta が中・受動態としてなぜ機能していないかという問題が残る。原則として 3pl. act. -an を 3pl. mid. -anta で置き換えることができる動詞は、態の区別が機能していないものに限られている [Jamison 1979]。

また下で詳しく論じるように、vidh- が取る典型的な構文では受益者が与格に置かれる。(5) の te は与格とも属格とも解釈でき、与格であれば vidh- の「与格の受益者+対格の供物」構文になる。「輝き」は dhī- 「洞察力」のメタファーとして使われ、同じ讃歌 8.19.14cd では「〔Agni の〕恩恵を授かる彼（人間）は、洞察力・輝きを以て、あらゆるもの・人を乗り越える」(vísveṭ sá dhībhīḥ subhāgo jānām āti¹ dyumnāir ... tāriṣat) とある。ここで重要なのは、dyumná- は人間側に属するもので、dhī- と並置されていることから、dyumná- はただの「輝き」ではなく「讃歌として具現化された洞察力の輝き」のような意

10) Hoffmann [1969: 6]: 'diesen (Lichtglanz) möchten wir uns (zur Zufriedenheit) zuteilen', 'diesen (Lichtglanz) möchten wir zur Genüge erhalten'. Renou [1964: 66]: '(cet éclat)... nous (autres) puissions nous te servir (en) cela de (toute nos) force(s)...'. Jamison & Brereton [2014]: 'in that (brilliance) of yours might we receive ritual shares'.

11) Jamison [2009: 35] によると -ema で終わる 1 人称複数の希求法は、機能的に 1 人称複数の接続法と同じで RV において接続法の代わりに使われることがある。

味を持っている [Bodewitz 2008: 91-92]。つまり、8.19.15 で Agni から輝きを授かった人間が、今度 8.19.16 でその輝きを自らの讃歌として具現し、それを Agni に捧げる¹²⁾という意味になる。

この見方に従うと、vidhemahi の中・受動態は能動態と同じような意味になり、従って意味以外の要因が⁵⁾ vidhemahi の中・受動態の選択に関わっていると考えられる。vidhemahi は、8 音節から成る行の cadence に置かれており、この場合の中・受動態の選択は韻律による可能性がある。同様な現象は van- の希求法の形式にも見られる。van- は通常能動態の希求法 vanéma を形成するが、8 音節から成る行の cadence に置かれている場合、中・受動態の vanemahi が 1 回 (RV 7.94.9c) 在証されている。

語根 vidh- を考察する際、もう一つ問題となる形式がある。それは RV に 3 回現れる vindhá-^{1e} という nasal infix thematic 現在である。Nirukta (6.18, ad RV 1.7.7) では、vindhá-^{1e} は vindā-¹ⁱ「見つける」で説明されているが、これは単なる音の類似に基づく説明と思われる。Petersburger Wörterbuch や Grassmann の辞書では、(3) で見た thematic アオリストを形成する語根 vidh- と、vindhá-^{1e} という現在語幹を形成する語根 vidh- が別々の項目で扱われている。後者には「(何かが⁵⁾ 無くなる、(何かに) 欠けている」という意味が当てられている¹³⁾。

vindhá-^{1e} は Book VIII と、Book VIII と密接な関係にある Book I の部分にしか現れない。また、vindhá-^{1e} の 3 例は全て中・受動態で否定辞 ná を伴っている。vindhá-^{1e} が「(何かに) 欠けている」を意味するという見方が正しいなら、ná vindhá-^{1e} は「(称賛などをいくら捧げても、その称賛に) 欠けることはない、(称賛が⁵⁾ 無くなることはない」を意味すると考えられる。以下の (6), (7), (8) に ná vindhá-^{1e} の例を示す。

(6) RV 1.7.7c (Gāyatrī)

<i>ná</i>	<i>vindhe</i>	<i>asya</i>	<i>suṣṭutīm</i>
not	be.lacking-PR.1SG	3SG-GEN	good.praise-ACC

「われは、彼に対する素晴らしい称賛に欠けることはない」¹⁴⁾

(7) RV 8.9.6c (Bṛhati)

<i>ayám</i>	<i>vām</i>	<i>vatsó</i>	<i>matibhir</i>	<i>ná</i>	<i>vindhate</i>
this-NOM	2DU-GEN/DAT	Vatsa-NOM	thoughts-INS	not	be.lacking-PR.3SG

「この Vatsa は、汝たちに対する称賛に欠けることはない」¹⁵⁾

12) 8.19.16b の vayám「(今度人間側から) われらが」はこの解釈に合う強調機能を持っている [Bodewitz 2008: 94, n. 11]。

13) Petersburger Wörterbuch: 'leer werden von, mangeln einer Sache (ins.)'.

14) Geldner [RV 訳]: 'ich kann mir doch in seinem Lobe nicht genug tun'. Hoffmann [1969: 6]: 'nicht teile ich mir zur Genüge (zu meiner Zufriedenheit) seine Lobpreisung zu'.

15) Geldner [RV 訳]: 'dieser Vatsa kann sich für euch an (frommen) Gedanken nicht genug tun'. Hoffmann [1969: 6]: 'dieser Vatsa tut sich mit Liedern für euch nicht Genüge'.

(8) RV 8.51.3a (Br̥hatī)

yá ukthébbhir ná vindháte
 who-NOM hymns-INS not be.lacking-PR.3SG

「称賛に欠けることのない者 (Indra) は…」¹⁶⁾

「(何かが) 無くなる, (何かに) 欠けている」を意味する別の語根 vidh- が存在するという前提に基づいて上記の例を訳しているが, Geldner [ad RV 1.7.7] および Hoffmann [1969] によると, vindhá-^{te} を形成する vidh- は thematic アオリストを形成する vidh- と同じ語根である。上で見たように, Hoffmann の見方では vidh- の中・受動態は「十分に受ける, 満足するまで授かる」を意味するので, 彼は ná vindhá-^{te} を「(称賛などをいくら捧げても・捧げられても) 満足しない」と訳している¹⁷⁾。vindhá-^{te} は, 語根 vid-「見つける」のアオリスト vidā- : 現在 vindā- との類推によって vidh- から二次的に形成されたと Hoffmann [1969: 6] は考えた。

vindhá-^{te} を, thematic アオリストを形成する語根 vidh- と結び付ける Hoffmann の説には問題がある。thematic アオリストを作る vidh- は 2 例を除いてすべて能動態で現れ, 否定辞を伴うことはない。García-Ramón [2004] が示したように, vidh- と dās- は補充関係にあり, vidh- からアオリストが作られ dās- から現在および完了が作られる。現在 vindhá-^{te} も vidh- から形成されるなら, 2 種類の現在語幹 (vidh- から作るものと dās- から作るもの) が存在するという奇妙な状況になる。以上の問題から, thematic アオリストを形成する語根 vidh- と, vindhá-^{te} という現在語幹を形成する語根 vidh- は別々の語根と考えるべきである。Petersburger Wörterbuch のように vindhá-^{te} は「(何かが) 無くなる, (何かに) 欠けている」を意味すると考えるのが妥当である¹⁸⁾。

II vidh- の構文

vidh- が取る構文を詳しく議論する前に, まずインドの文法家の vidh- の意味についての説明を見てみよう。Nirukta (10.23) は, vidh- の意味を vidhatir dāna-karmā 「vidh- とは, 与える行為を指す」と説明している。Naighaṇṭuka Kāṇḍa (3.5) では vidhema は, 類義語

16) Geldner [RV 訳]: 'Der an Lobliedern nicht genug bekommt, ...'. Hoffmann [1969: 7]: '(Indra), der sich mit Liedern nicht Genüge tut ...'.

17) Hoffmann [1969] の訳は次の通り: RV 1.7.7c 'nicht teile ich mir zur Genüge (zu meiner Zufriedenheit seine Lobpreisung zu', RV 8.9.6c 'dieser Vatsa tut sich mit Liedern für euch nicht Genüge', RV 8.51.3a '(Indra), der sich mit Liedern nicht Genüge tut (bzw. sich mit Liedern nicht zufriedenstellt)'.

18) vindhá-^{te} 「(何かが) 無くなる, (何かに) 欠けている」の語根 vidh- は, vidhāvā- 「寡婦」, vidhū- 「独りぼっちの?」(意味不明) および vidhura- 「独りになった, 足りない」と関係しているように思われる。これらの語の形を見ると Caland system で説明できそうだが, ここで詳しく議論しないことにする。

の saparya- 「献ずる」, namasya- 「敬意を払う」などの動詞と共に paricarāṇa-karman- 「奉仕する行為」を表す動詞に分類されている。RV の注釈者である Sāyaṇa は概ね Naighaṇṭuka Kāṇḍa の vidhema の説明に従っているが¹⁹⁾、彼は所々で vidh- を vi-dhā- 「分け与える」の現在語幹と言い換えている²⁰⁾。

上で見たように、Thieme の提案が出る前の 20 世紀前半までの辞書や訳では、vidh- は「敬意を表する」あるいは「捧げる」と解釈されていた²¹⁾。vidh- は以下の (9) に示されているように主に 2 つの構文を取り、「敬意を表する」で訳すか「捧げる」で訳すかという選択は構文の種類に依る。つまり、対格を取るかどうかで訳が変わってくる。

(9) vidh- が取る 2 種類の構文

(a) 対格のないタイプ: 「(供物を以て神に) 敬意を表する」

(b) 対格のあるタイプ: 「(供物を神に) 捧げる」

以下の (10), (11) は構文 (a) の例である。(11) のように、具格の供物は表されていない。

(10) RV 2.6.2a (Gāyatrī)

ayā te agne vidhem_a
this-INS 2SG-DAT Agni-VOC honor-AOR.OPT.1PL

「Agni よ、これ(薪)を以てわれら願わくは、汝に敬意を表せんことを」²²⁾

(11) RV 1.136.5a (Atyaṣṭi)

yó mitrāya vāruṇāya_a avidhaj jāno
who-NOM Mitra-DAT Varuṇa-DAT honor-AOR.IND.3SG man-NOM

「Mitra と Varuṇa に敬意を表した人は…」²³⁾

以下の (12), (13) は構文 (b) の例である。(12) は (13) と違って、具格の供物は表されていない。

(12) RV 1.189.1d (Triṣṭubh)

bhūyishām te nāmaūktim vidhema
most.abundant-ACC 2SG-DAT praise-ACC offer-AOR.OPT.1PL

「われら願わくは、汝(火神 Agni) に最も豊富な称賛を捧げんことを」²⁴⁾

19) 例えば、vidhatīḥ paricarāṇakarmā, vidhema saparyatīti (Sāyaṇa ad RV 1.36.2), vidhema paricarema, vidhatīḥ paricarāṇakarmā (Sāyaṇa ad RV 1.114.2).

20) avidhat vidadhātī (Sāyaṇa ad RV 8.23.21), vidhema vidadhmaḥ, kurma ity arthaḥ (Sāyaṇa ad RV 8.96.8).

21) 'den Göttern (dat.) dienen, Ehre erweisen; sich hingeben; dienend/ehrend hingeben, widmen (mit acc.)' [Petersburger Wörterbuch 1070]; 'einem Gotte (dat.) huldigen, dienen (mit oder ohne ins.); verehren; ehren (acc. mit ins.); jemandem (dat.) etwas (acc.) huldigend hingeben, weihen, widmen; hold sein (von Göttern)' [Grassmann 1872: 1280]; 'recht machen, willfährig sein, aufwarten, dienen, huldigen, weihen, verehren' [Geldner RV 訳].

22) Geldner [RV 訳]: 'Damit wollen wir dir aufwarten, Agni'.

23) Geldner [RV 訳]: 'Welcher Mann es dem Mitra und Varuṇa recht gemacht hat, ...'.

24) Geldner [RV 訳]: 'Wir wollen dir die größte Huldigungsrede recht machen'.

(13) RV 8. 23. 21ab (Uṣṇih)

yó asmai havyádātibhir
 who-NOM 3SG-DAT gifts.of.oblations-INS
āhutim mārto vidhat
 oblation-ACC mortal-NOM offer-AOR.IND.3SG

「供物から成る贈り物を以て、彼（火神 Agni）に供物を捧げた人間は……」

(10) で見られる「与格の受益者＋具格の供物」構文は最も頻繁に現れるもので、それに対して、(12), (13) のように対格を伴う構文は比較的少ない。以下に vidh- が取る主な構文とその在証数を表にまとめる²⁵⁾。RV 6. 1. 10a における máhi「偉大なものを～偉大に」の形式が目的語か副詞かは曖昧で、そのため在証数が 17～18 回および 2～3 回になっている。

表 2 vidh- が取る主な構文とその在証数

在証数	受益者	供物	供物
17～18 回	与格	—	具格
8 回	与格	—	—
5 回	与格	対格	—
2～3 回	与格	対格	具格

上の表からは、受益者（神）が必ず与格に置かれていることが分かる。しかし、Grassmann [1872: 1280], Haudry [1977: 352] や多くの先行研究・RV 訳において、受益者が対格に置かれる構文も想定されている。この構文の例として Grassmann は次の (14) を挙げている²⁶⁾。

(14) RV 8. 96. 8d (Triṣṭubh)

śúṣman ta enā haviṣā vidhema
 vehemence-ACC 2SG-GEN/DAT this-INS oblation-INS honor-AOR.OPT.1PL

Geldner は (14) を「この供物を以て我々は、汝の気力（acc.）に敬意を払おう」（wir wollen deinem Mut mit diesem Opfer huldigen）と訳しており、彼は te を与格ではなく属格で解釈し、そして vidhema という行為の受益者を対格の śúṣmam で表されていると考えている²⁷⁾。

しかし、Bodewitz [2008: 92] が指摘しているように、śúṣma-「気力、荒々しさ」は soma を指している。また te が soma の飲み手 Indra を指していることから、この文を「供物である soma を受益者 Indra に捧げよう」と解釈できる。つまり、この構文は上の

25) より詳しい表は付録に挙げる。

26) RV 1. 149. 1c úpa dhrājantam ádrayo vidhán it では、dhrājantam は vidhán に支配されていない。it の位置から、úpa と vidhán が繋がっていないことは明らかで、何らかの移動動詞が省略されていると考えられる [Thieme 1949: 36 n. 3]。なお、語根 vidh- は preverb を伴わない [Hoffmann 1969: 5]。Thieme の訳は次の通りである：'hin zu ihm, der [herbei-]fliegt, [fliegen= (eilen)] die Steine. Sie wollen [ihm] zuteilen'.

27) Jamison & Brereton [2014] も同様の解釈をしている：'We would honor your unbridled force with this oblation'. 脚注 9 も参照されたい。

(13) と同じものであり, ここで受益者が対格に置かれていると想定しなくてもよいことになる。

また, vidh- に対応する古アヴェスタ語の語根 vid- は, vidh- と同じ thematic アオリストを形成しており, 構文の観点からも vidh- と似ている振る舞いをしている。vid- は3回のみ在証されており, その例を以下に挙げる。

(15) Y. 51.6

yā hōi nōit vīdāiti apāmē aṇhāuš
 who-NOM 3SG-DAT not honor-AOR.SUBJ.3SG final-LOC existence-GEN
urūuāēsē
 turning.point-LOC

「彼 (Ahura Mazdā) に献身しないものに [悪いものよりより悪いものが起こる], 世の終末の一周に際して」²⁸⁾

(16) Y. 53.4

yā fəδrōi vīdāt paiṇiāē-cā vāstriiaēibiō
 who-NOM F father-DAT honor-AOR.SUBJ.3SG husband-DAT-and herdsmen-DAT.PL
atcā +xvaētauuē
 and family-DAT

「父のために献身し, また夫のために, 牧養者たちのために, また家族のために [献身する] 女性は……」²⁹⁾

(17) Y. 33.3

vīdās vā ʒBaxšaṇhā gauuōi
 honor-AOR.PT.NOM or zeal-INS cow-DAT

「あるいはその人が熱意を以て牛³⁰⁾に献身するなら……」³¹⁾

上の例はすべて, ヴェーダ語にも見た「与格の受益者」構文を取っており, ヴェーダ語に最も多く現れる具格を伴う構文も (17) に在証されていることが分かる。ヴェーダ語の場合, vidh- の受益者が「神」であるのに対して, vid- の場合には「神, 父, (宗教的な意味をもつ) 牛」など, 尊敬に値するものが受益者になっている。vidh- で見た対格を伴う構文は古

28) 和訳は伊藤 1967 を参考にした。Insler [1975: 105]: '(But what is worse than bad shall be,) at the final turning point of existence, for that man who shall not serve Him'.

29) Insler [1975: 111]: '(For I shall join in marriage her among you, the one) who shall serve father, husband, pastors and family'.

30) 「牛」はここで, 天則と正しい思考に従う世の中の在り方を表していると思われる [Insler 1975: 25, n. 2].

31) Insler [1975: 51]: '(The person who is very good to a truthful man, be he allied by family, or a member of his community, or allied by clan, Lord,) or be he someone who continues to serve the cow (the good vision) with zeal, (such a person shall be on the pasture of truth and good thinking)'.

アヴェスタ語に在証されていない。また, *vidh-* と *vid-* は意味的にも共通しており, Thieme および Hoffmann が提案した意味「分配する」ではなくて「敬意を表する, 献身する」などの意味を表している。

以上のデータの考察から次の重要な指摘ができる。それは *vidh-* の場合でも *vid-* の場合でも, 受益者が対格で現れる構文は存在しないということ。この事実は先行研究に指摘されておらず, *vidh-* の受益者を対格でも表示できるという誤った考え方は誤訳を生む他, 形式についての不適切な判断をももたらしている。

例えば, (3) に挙げられている分詞 *vidhánt-* について, Lowe [2015: 243, 265] は, この分詞は RV において「(神に) 敬意を表する者, 祭式に関わる者」を意味する名詞として語彙化されていることを指摘している。以下の (18) はその例の一つである。

(18) RV 1. 73. 1d (Triṣṭubh)

hótā_ iva sādma vidható ví tārīt
 hotar-NOM like seat-ACC worshipper-GEN PVB traverse-AOR.INJ.3SG
 「Hotar 祭官のように, 彼 (火神 Agni) は敬意を表する者の席を横断する」³²⁾

この名詞用法の他に, *vidhánt-* が対格を取っている 2 例を Lowe は挙げており, このことから *vidhánt-* が本来の分詞としての機能を RV にまだ残していたと判断している。以下にその 2 例を示す。

(19) RV 2. 4. 2ab (Triṣṭubh)

imám vidhánto apām sadhásthe
 this-ACC worship-AOR.PT.NOM waters-GEN seat-LOC
dvitā_ adadhur bhṛgavo³³⁾ vikṣav āyóh
 once.again install-IMP.3PL Bhṛgus-NOM clans-LOC Āyu-GEN

(20) RV 10. 46. 2ab (Triṣṭubh)

imám vidhánto apām³⁴⁾ sadhásthe
 this-ACC worship-AOR.PT.NOM waters-GEN seat-LOC
paśúm ná naṣtām padāir ānu gman
 cow-ACC like vanished-ACC tracks-INS PVB follow-AOR.INJ.3PL

Lowe [2015: 265] は 2. 4. 2a および 10. 46. 2a を ‘Worshipping this one in the seat of the waters ...’ と訳しており, 他のほとんどの RV 訳でも同様な解釈がなされている [Geldner, Renou, Witzel & Gotō など]。しかし, *vidhánt-* がこの 2 例を除いて「(神に) 敬意を表する

32) Geldner [RV 訳]: ‘er schritt den Opferplatz des Verehrers ab wie der Opferpriester’.

33) Van Nooten & Holland [1994] の *bhṛgavo* は間違いである。

34) 10. 46 では, 10 音節から成る Triṣṭubh が多く見られる。これはこの讃歌の特徴の一つと考えられるので, 10. 46. 2a が 2. 4. 2a と同じ形式を含んでいるにもかかわらず, 韻律上の理由から 10. 46. 2a の *apām* を *apām* と読まないことにする。

者」を意味する名詞として機能している事実、また上で見た vidh- の受益者が対格で現れない事実から、(19), (20)における imám は b pāda に出てくる定動詞に支配されていると考えるのが妥当である。実際に, Jamison & Brereton [2014: 406, 1452] はそのように解釈をしている: 'This one here — having done honor (to him) in the seat of the waters — once again the Bhṛguṣ have installed among the clans of Āyu', 'This one here — having done honor (to him) in the seat of the waters, they followed him along his tracks like a vanished cow'. 2.4 および 10.46 の讃歌全体における対格に置かれる名詞と動詞の配列など、語順の点からも a pāda の imám (=agnim) が b pāda の定動詞に支配されているという解釈を支持する特徴が見られる。例えば、2.4.2 の直後の 2.4.3a に agnīm が pāda の初めに現れ、これは次の b pāda の dhuḥ で支配されている。つまり 2.4.2ab の imám (=agnim) ... adadhuh 「彼らはこの者 (Agni) を捉えつけた」と 2.4.3ab の agnīm ... dhuḥ 「彼らは Agni を捉えつけた」は並行的な構造を示している。

表2に見られるように、vidh- の場合、受益者が与格に置かれ、供物が表されている場合にはそれは対格か具格で現れる。Delbrück [1888: 305] が指摘しているように、vidh- は id-, dās-, saparya- などと同じく「祭式動詞」の一種である。さて次に、id-, dās-, saparya- がどのような構文を取っているのかを見てみよう。

Haudry [1977: 344-363] では、「祭式動詞」がどのような名詞句と共に現れ、その名詞句がどのような格に置かれるのかが詳しく紹介されている。上で見たように、vidh- について、Haudry [1977: 352] は受益者が対格に置かれる構文を誤って挙げているが、この点を除くと、vidh- と id-, dās-, saparya- との間に重要な違いを見て取ることができる。これらの動詞とともに供物が表されている場合、vidh-, id-, dās-, saparya- では、供物は具格でも対格でも現れる。しかし、受益者が表されている場合、vidh- は与格しか許さないのに対して、id-, dās-, saparya- では受益者が与格にも対格にも置かれる。以上は以下の表3のようにまとめることができる。

表3 祭式動詞の名詞句の格

動 詞	受益者	供 物
vidh-	与 格	具格～対格
id-	与格～対格	具格～対格
dās-	与格～対格	具格～対格
saparya-	与格～対格	具格～対格

これらの動詞で共通しているのは、供物は具格でも対格でも現れることができるという点である。この振る舞いは祭式動詞の特徴の一つであり、紀元前の文法家の間でもよく指摘された事実である。例えば、Kātyāyana (ad Pāṇini 1.4.32) は karmanāḥ karaṇasamjñā 「karman kāraka (直接目的語、ここで対格が付与される) の代わりに karaṇa kāraka (道具・手段、ここで具格が付与される)」という名称 [が導入される] と述べ、この現象の例として Patañjali は paśunā rudraṃ yajate 「彼は家畜を以て Rudra に奉仕する」を挙げてお

り、この文は *paṣuṃ rudrāya dadāti* 「彼は家畜を Rudra に捧げる」と同じ意味を表している」と指摘している。また、Pāṇini 2.3.3 によると、ヴェーダ語では、祭式動詞である *hu-* 「(注いで) 捧げる」の直接目的語を表すのに具格も使われる。

表 2 を見ると、大半の場合には *vidh-* は対格を伴っていないことが分かる。また、対格で現れる名詞句と具格で現れる名詞句を比較すると、*āhutim~havyāiḥ, mānaḥ~matibhiḥ, vācaḥ~stōmaiḥ, nāmaūktim~ukthāiḥ* のように、意味的に近い語が認められる。これらの点から、供物が対格に置かれるのは一種の統語的なヴァリエーションに過ぎないと考えられ、従って「与格の受益者+対格の供物」という構文に重きを置いて *vidh-* の意味を「分配する」と推察している Thieme 説には問題がある。

RV では *vidh-* の受益者が決して対格に置かれなかったことが明らかになった。一方、後の Atharvaveda Śaunaka (AVŚ) では、どうであろうか。付録 2 に AVŚ における *vidh-* の用例を全てまとめているが、これを見ると RV と同じく最も頻繁に現れる構文は「与格の受益者+具格の供物」である。しかし、興味深いことに受益者が対格に置かれる構文も 2 回在証されている。以下にその 2 例を挙げる。

(21) AVŚ 1.12.2abc (Triṣṭubh)

<i>āṅge-aṅge</i>	<i>śocīṣā</i>	<i>śiśriyānām</i>	
each.limb-LOC	burning-INS	lurking-ACC	
<i>namasyāntas</i>	<i>tvā</i>	<i>haviṣā</i>	<i>vidhema</i>
paying.homage-NOM	you-ACC	oblation-INS	honor-AOR.OPT.1PL
<i>aṅkānt</i>	<i>samaṅkān</i>	<i>haviṣā</i>	<i>vidhema</i>
hooks-ACC	grapples-ACC	oblation-INS	honor-AOR.OPT.1PL

「焼けるような痛みを伴う、それぞれの関節に宿る汝に、われら願わくは、供物を以て、尊敬しつつ、敬意を表せんことを。供物を以て、われら願わくは、引っ掛け・つかみに敬意を表せんことを」³⁵⁾

(22) AVŚ 6.39.2ab (Triṣṭubh)

<i>āchā</i>	<i>na</i>	<i>īndram</i>	<i>yaśāsaṃ</i>	<i>yāsobhir</i>
towards	1PL-GEN	Indra-ACC	glorious-ACC	glories-INS
<i>yaśasvīnaṃ</i>	<i>namasānā</i>	<i>vidhema</i>		
glorious-ACC	worshipping-NOM	honor-AOR.OPT.1PL		

「名声のある、名声に満ちた、我らの Indra に対して、名声を以て、尊敬するわれら願わくは、敬意を表せんことを」³⁶⁾

35) Whitney [1905: 13]: 'Thee, lurking in each limb with burning, we, paying homage, would worship with oblation; we would worship with oblation the hooks, the grapples ...'.

36) Whitney [1905: 310]: 'Unto our glorious Indra, rich in glory, would we, rendering homage, with glories pay worship'.

(21) の tvā「汝を」は病気的一种と思われる。対応する箇所が Atharvaveda Paippalāda (AVP) にも在証されており、そこでは動詞は vidhema ではなくて yajāmi である。yaj- の受益者は通常対格に置かれるので、また vidh- と yaj- が意味的に近いことから、AV の時代には vidh- は yaj- の影響を受けて受益者が対格に置かれていると考えられる。(22) も興味深い例で、a pāda の文頭に対格を支配する áchā がある。それによって、受益者である Indra が対格に置かれている可能性はあるが、その詳細は明らかでない。Thieme [1949: 36] が指摘しているように、Vājasaneyisaṃhitā (VS) および Taittirīyabrāhmaṇa (TB) の時代になると vidh- は yaj- との類推で受益者が対格に置かれることもある。RV において、対格の受益者構文は一切見られないが、RV 以降の AV や VS, TB においてこの二次的な用法が認められる。

Ⅲ 他 の 問 題

対格が現れる構文に重きを置き過ぎるという問題以外にも、vidh- を vi-dhā- から導く Thieme および Hoffmann の説には問題がある。上でも触れたように、vidh- の場合には、人間が動作主で神が受益者であるのに対して vi-dhā- は神が動作主で人間が受益者である [Bodewitz 2008: 81]。また、ヴェーダの祭式では人間が神に供物を「分配する」というような発想は見受けられない³⁷⁾。

Thieme と Hoffmann の考え方では、preverb vi と語根 dhā- の語根アオリストの形式が thematic アオリストとして再解釈された結果、新しい語根 vidh- ができた。vi-dhā- から vidh- を導くために、Hoffmann [1969: 4-5] はヴェーダ語に他に存在しないような形式、つまり語根アオリスト分詞 *dhánt- ($\sqrt{\text{dhā-}}$) や語根アオリスト希求法 *dhéma を想定している³⁸⁾。また preverb vi が語根 dhā- の一部になっているとも想定している。しかしながら、これに並行する現象はヴェーダ語には他に見られない。

結 語

以上、ヴェーダ語 vidh- および古アヴェスタ語 vid- は、vi-dhā-「分配する」と無関係で、インド・イラン祖語ですでに独立した語根 *(H)uidh-³⁹⁾ にさかのぼると考えられる⁴⁰⁾。*(H)uidh- は thematic アオリストのみを形成する。この動詞は祭式動詞の一種であり、神

37) 詳しくは Bodewitz [2008] を参照。

38) これらの問題については Catt [2014: 1-23] を参照。

39) 初頭の喉音については Lubotsky [1994] を参照。

40) Insler [1975: 201] も Thieme/Hoffmann の説を否定し、インド・イラン祖語 *vidh- を想定している。

である受益者が与格に置かれる構文を取っていた。vidh- について、受益者が対格に置かれる構文は多くの先行研究において想定されているが、この構文は RV では現れず、AV に初めて非典型的な構文として見られる。また、vindhā-te は、Petersburger Wörterbuch でも想定されているように「(何かが) 無くなる, (何かに) 欠けている」を意味し、この語根は vidh- 「敬意を表する, 捧げる」とは別のものであると論じた。

インド・イラン祖語 *(H)uidh- の起源は明らかでない。もしこの語根がラテン語 dividō, dividere 「分ける」とトカラ語 AB wātk- 「決まる, 異なる, 分ける, 命令するなど」と関係するなら, *(d)ui-dh₁- 「二つに分ける」にさかのぼると考えることができるかもしれない。しかし, 「二つに分ける」と, インド・イラン祖語 *(H)uidh- 「敬意を表する, 捧げる」との間には大きな意味の差があると言わざるをえない。特にラテン語 dividō, dividere では, 「分ける」という意味がはっきりしているが, この語は祭式動詞としては使用されない。

vidh- を vi-dhā- から導く Thieme と Hoffmann の説は直感的に分かりやすく, それゆえにこれまで非常に強い影響力を及ぼしてきた。しかし実際の言語事実を文献学的に詳細に検証すれば, 問題点が浮き彫りになる。

略号一覧

acc=accusative	ins=instrumental
act=active	loc=locative
aor=aorist	mid=middle
AV=Atharvaveda	nom=nominative
AVP=Atharvaveda Paippalāda	opt=optative
AVŚ=Atharvaveda Śaunaka	pl=plural
dat=dative	pr=present
f=feminine	pt=participle
gen=genitive	pvb=preverb
impf=imperfect	RV=Rgveda
ind=indicative	sg=singular
inf=infinitive	subj=subjunctive
inj=injunctive	voc=vocative

参考文献

- Bodewitz, Henk (2008) The Refrain *kāsmāi devāya haviṣā vidhema* (RV 10, 121). In: Kulikov, Leonid & Maxim Rusanov (eds.) *Indologica : T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*, Book 1. Moscow, 79–98.
- Catt, Adam (2014) *Studies in Indo-Iranian Historical Linguistics*. PhD diss., Kyoto University.

- Delbrück, Berthold (1888) *Altindische Syntax* (Syntaktische Forschungen V). Halle (Saale).
- Renou, Louis (1964) *Études védiques et pāṇinéennes* (Publications de l'institut de civilisation indienne, Série in-8°), Tome XIII. Paris.
- EWAia=Mayrhofer, Manfred (1992-2001) *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*. 3 vols. Heidelberg.
- García-Ramón, José Luis (2004) On Vedic Suppletion: *dās* and *vidh*. In: Penney, John (ed.) *Indo-European Perspectives: Studies in Honour of Anna Morpurgo Davies*. Oxford, 487-513.
- Geldner=Geldner, Karl (1951-1957) *Der Rig-Veda. Aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen*. 4 Bde. [Harvard Oriental Series 33-36]. Cambridge.
- Grassmann, Hermann (1872) *Wörterbuch zum Rig-Veda*. Leipzig¹ [=Wiesbaden¹ 1964]. 6., überarbeitete und ergänzte Auflage von Maria Kozińska. Wiesbaden.
- Haudry, Jean (1977) *L'emploi des cas en védique*. Lyon.
- Hoffmann, Karl (1969) Vedisch *vidh*, *vindh*. *Die Sprache* 15, 1-7 [=Aufsätze zur Indoiranistik, vol. I, 1975, 238-244. Wiesbaden: Reichert].
- Insler, Stanley (1975) *The Gāthās of Zarathustra* (Acta Iranica 8). Tehran-Liège.
- Jamison, Stephanie (1979) Voice Fluctuation in the Rig Veda: Medial -*anta* in Active Paradigms. *Indo-Iranian Journal* 21, 149-169.
- Jamison, Stephanie (1999) Once More, Yet Again, the Vedic Type *dheyām* Revisited: Metrical Marginalia to a Persistent Problem. In: Eichner, Heiner & Luschützky, Hans (eds.) *Compositiones Indogermanicae in Memoriam Jochem Schindler*. Prague, 165-181.
- Jamison, Stephanie (2009) Where Are All the Optatives? Modal Patterns in Vedic. In: Yoshida, Kazuhiko & Vine, Brent (eds.) *East and West: Papers in Indo-European Studies*. Bremen, 27-45.
- Jamison, Stephanie & Brereton, Joel (2014) *The Rigveda: The Earliest Religious Poetry of India*. Oxford.
- Lowe, John (2015) *Participles in Rigvedic Sanskrit: The Syntax and Semantics of Adjectival Verb Forms*. Oxford.
- Lubotsky, Alexander (1994) RV. *avidhat*. In: Dunkel, George, Meyer, Gisela, Scarlata, Salvatore & Seidl, Christian (eds.) *Früh-, Mittel-, Spätindogermanisch, Akten der IX. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, Zürich, 5.-9. Oktober 1992*. Wiesbaden, 201-206.
- Macdonell, Arthur (1910) *Vedic Grammar*. Strassburg.
- Macdonell, Arthur (1916) *A Vedic Grammar for Students*. Oxford.
- Van Nooten, Barend & Holland, Gary (eds.) (1994) *Rig Veda: A Metrically Restored Text with an Introduction and Notes* (Harvard Oriental Series 50). Cambridge.
- Petersburber Wörterbuch=Böhtlingk, Otto & Roth, Rudolph (1855-1875) *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 Bde. St. Petersburg.
- Thieme, Paul (1949) *Untersuchungen zur Wortkunde und Auslegung des Rigveda*. Halle (Saale).

- Whitney, William (1885) *The Roots, Verb-forms, and Primary Derivatives of the Sanskrit Language*. Leipzig.
- Whitney, William (1905) *Atharva-veda Samhitā: Translated with a Critical and Exegetical Commentary* (Harvard Oriental Series 7-8), revised and edited by Charles Lanman. 2 vols. Cambridge.
- Witzel, Michael & Gotō, Toshifumi (2007) *Rig-Veda: das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis*. Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael Witzel und Toshifumi Gotō, unter Mitarbeit von Eijirō Dōyama und Mislav Ježić. Frankfurt am Main.
- 伊藤 [1967] = 辻直四郎 (訳者代表) 『ヴェーダ アヴェスター』筑摩書房.
- 辻直四郎 (1970) 『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波書店.

(京都大学大学院文学研究科)

付録 1: RV における vidh- の構文

与格 (受益者) + 具格 (供物) : 17~18 回

形 式	箇 所	与 格	具 格
vidhema	1. 114. 2b	te (= Rudra)	nāmasā
vidhema	2. 6. 2a	te (= Agni)	ayā (= samidhā)
vidhēma	2. 9. 3ab	te (= Agni)	stōmaiḥ
ávidhat	2. 26. 4a	asmai (= Brahmanaspati)	havyaiḥ
vidhema	2. 35. 12ab	asmái (= Apām Napāt)	yajñaiḥ, nāmasā, havirbhiḥ
vidhema	4. 4. 15a	te (= Agni)	samidhā
vidhema	5. 4. 7ab	te (= Agni)	ukthaiḥ, havyaiḥ
vidhema [māhi が副詞であれば]	6. 1. 10ab	te (= Agni), mahé	nāmobhiḥ, samidhā, havyaiḥ, gīrbhiḥ, ukthaiḥ
ávidhat	6. 54. 4a	asmai (= Pūṣan)	haviṣā
vidhema	7. 14. 2a	te (= Agni)	samidhā
vidhema	7. 63. 5cd	vām (= Mitra, Varuṇa)	nāmobhiḥ, havyaiḥ
vidhema	8. 23. 23abc	agnāye	matibhiḥ
vidhema	8. 43. 11c	agnāye	stōmaiḥ
vidhema	8. 48. 12c	sómāya	haviṣā
vidhema	8. 48. 13c	te (= Indu)	haviṣā
vidhema	8. 54. 8a	te (= Indra)	stōmebhiḥ
vidhema	10. 121. 1-9d	devāya	haviṣā
vidhema	10. 168. 4d	vātāya	haviṣā

与格 (受益者) : 8 回

形 式	箇 所	与 格
vidhema	1. 36. 2b	te (= Agni)
vidhāti	1. 120. 1c	vām (= Aśvins) [vām は c pāda に現れないが, a, b pāda と並行的な構造を示している点から, vām が c pāda に省略されていると考えられる]
ávidhat	1. 136. 5a	mitrāya, varuṇāya
ávidhat	2. 1. 7d	te (= Agni)
ávidhat	2. 1. 9c	te (= Agni)
vidhat	8. 5. 22a	vām (= Aśvins)
ávidhat	8. 27. 15d	dhāmabhyaḥ
ávidhat	10. 83. 1a	te (= Manyu)

与格 (受益者) + 対格 (供物) : 5 回

形 式	箇 所	与 格	対 格
vidhema	1. 189. 1d	te (= Agni)	nāmaūktim
vidhanta	3. 3. 1ab	vaiśvānarāya	rātnā
vidhemahi	8. 19. 16d	te (= Agni)	tāt (= dyumnām)
ávidhat	8. 61. 9ab	te (= Indra)	vacaḥ
ávidhat	9. 114. 1d	te (= Soma)	mānaḥ

与格 (受益者) + 対格 (供物) + 具格 (供物) : 2~3 回

形 式	箇 所	与 格	対 格	具 格
vidhema	6. 1. 10ab	te (= Agni), mahé	māhi [副詞?]	nāmobhiḥ, samidhā, havyaiḥ, gīrbhiḥ, ukthaiḥ
ávidhat	8. 23. 21ab	asmai (= Agni)	áhutim	havyádātibhiḥ
vidhema	8. 96. 8d	te (= Indra)	śúsmam	haviṣā

その他の構文		
形 式	箇 所	具 格
vidhán	1. 149. 1c	—
vidhema	2. 24. 1b	girā

付録 2 : AVŚ における vidh- の構文					
形 式	箇 所	与格 (受益者)	対格 (受益者)	具格 (供物)	対格 (供物)
vidhema	1. 12. 2 (2x)	—	tvā, anḱān 等	haviṣā	—
vidhema	1. 31. 1	āśāpālébhyaḥ 等	—	haviṣā	—
vidhema	4. 2. 1-8 (=RV)	devāya	—	haviṣā	—
ávidhat	4. 32. 1 (=RV)	te (=Manyu)	—	—	—
vidhema	6. 39. 2	—	īndram	yāsobhiḥ	—
vidhema	6. 41. 1-2	mānase, cētase 等	—	haviṣā	—
vidhema	6. 80. 1 (=6. 80. 3)	te	—	haviṣā	—
vidhema	6. 97. 1	—	—	—	haviḥ
vidhema	7. 79. 3	amāvāsyāyai	—	haviṣā	—
vidhema	7. 109. 6	tébhyaḥ (=Indu)	—	haviṣā	—
vidhema	10. 3. 23	sarpébhyaḥ	—	nāmasā	—
vidhema	18. 2. 49	pitṛbhyaḥ	—	nāmasā	—